ネットワーク技術と身体性に関する考察

Study on the Network Technology and the Embodimemt

1W070333-3　滝口　真登　　指導教員　内田　種臣　教授

TAKIGUCHI Masato　　Prof. UCHIDA Taneomi

概要：　本論文は、コンピュータによる情報処理技術と人間の身体性について行われてきた議論についての対立する二つの立場からの主張を整理する事を通して、現代におけるネットワーク技術と身体性の関係について考察を行うものである。二つの対立する主張として、ウィリアム・J・ミッチェルによる指摘と、ヒューバート・L・ドレイファスによる考察を取り上げる。ミッチェルは、人間の認知プロセスとコンピュータによる計算プロセスの間に明らかな違いは認められないと主張する。これに対しドレイファスは、コンピュータにおける身体性の欠如を指摘し、人間とコンピュータの情報処理プロセスの間の差異を主張する。今回取り上げる２つの主張は西暦2000年頃になされたものだが、本論文では近年における技術的な環境変化についても加味しつつ考察を行う。

キーワード：ネットワーク技術、身体性、心

Keywords: network technology, embodiment, mind,

１．はじめに

ネットワーク技術と人間の身体性に関して対立する２つの立場について整理し、両者の主張の対立部分に関して比較を行った上で、近年における技術的な状況を加味した考察を試みる。具体的にはまず、ミッチェルが主張する人間の「空間的に拡張されたサイボーグ化」という考え方について整理する。最後に、双方の主張を現在の時点から改めて考察することで見えて来る新たな問題意識を提示する。

２．人をネットワークの一部と捉える立場

ミッチェルが提示した人間の「サイボーグ化」という考え方は、ネットワーク技術の向上によって生物的・社会的な境界による自己の規定が意味をなさなくなる状況を言い表している。ネットワークに基づくサービスを提供する為の機器が人々のごく身近に配置されるにつれ、それらが心身の拡張として必要不可欠な存在となり、不可分なネットワークとして自己が規定されるようになるとミッチェルは主張する。またもうひとつの論点として、無線ネットワークを通じた情報の提供・交換が可能になった事で、それが可能になる以前にあった人間と空間の固定的な関係が解消されるという点についても触れている。つまり、機器の小型化や無線接続環境の整備により場所に関係なくネットワークを通じて情報にアクセスできる状態が実現された時、それを利用して活動を行う人間もまた、ネットワークを構成する要素の一部として捉える事が可能だとミッチェルは主張する。この考え方によれば、ネットワークを利用する人間もネットワークを構成する電子機器も、外側から観察できる振る舞いとして行っているのはどちらも情報の流出入であり、その意味ではどちらもネットワークノードの１つとして並列に見なす事が出来る。「内在的な認知プロセスと外在的な計算プロセスの間に明らかな違いは何もない」＊1というのがミッチェルによる主張である。

３．ネットワークにおける身体性の欠如

次に、身体とその周辺のシステムの間に明確な差異はないという主張に対して批判的な立場をとるドレイファスの考えについて整理する。ドレイファスの主張は、身体を持たない情報処理システムは自らの環境について学習し理解する事は出来ないというものである。この主張は、初期のインターネット利用者に対して行われた調査結果をもとに、ネットワーク通信を介した人間同士のコミュニケーションと現実世界で直接やり取りされる対面でのコミュニケーションの間の違いについて指摘することを通してなされている。ドレイファスはまず、「インターネットを使えば使うほど、社会的な交際範囲は縮小し、抑鬱と孤独感が増す事になった」＊2というカーネギーメロン大学による調査結果を引用する事から問題

提起を始めている。この調査によると、オンラインの人間関係が身体的な接近に支えられたそれと比べて限定されたものであり、実際に顔を合わせていないことが問題であると結論されている。身体を伴わないオンラインの生活で得られるものは一体何であり、そこにどのような危険があるのかという点について明らかにするために、ドレイファスはネットワークにおいて欠如する人間のいくつかの能力について指摘している。それには「理解し、区別する能力」「成功と失敗を受け止める感性」などが挙げられる。身体が失われる場合、関連性やリアリティ、意味が失われることを意味し、感情を伴った身体が、人間の能力にとって重要な役割を果たしているとドレイファスは主張する。

４．両者の主張を改めて考察する

両者の主張の前提として、ネットワークインフラの整備とそれに伴うサービスの普及が現代の人間の生活様式を考える上で無視できないものであるという認識がある。また、両者の主張において明示的に対立する箇所は次のようになる。ミッチェルは人間の精神的・身体的活動と外部の情報処理システムの活動には差異はないとしている。対してドレイファスは、身体を介した実際の体験に基づく諸活動は、ネットワークを通じたオンラインでの脱身体的な環境の中では再現できない、つまり人間の活動プロセスとコンピュータによるプロセスは異なるものだと主張する。両者の主張における論点は、コンピュータと人間が処理できる情報、また処理の仕方に差異があるかどうかという点である。

これらの主張がなされた後 10 年が経過した近年の状況を加味すると、両者の主張に基づく予測には不正確だといわざるを得ない点がいくつか見受けられる。ネットワークインフラは整備され通信速度も飛躍的に向上したが、ミッチェルの予想した「人間の諸活動が電子的なプロセスに全て変換される電子的非定住空間」というアイデアは実現されていない。また、「インターネットを通じたコミュニケーションは身体性を欠如しているが故に抑鬱感ばかりを生みだす」というドレイファスの主張も正確ではないと言える。

５．結論（まとめ）

本論文で取り上げた２つの主張で前提とされていた「現実世界とネットワーク上の情報との対応関係が今後より精度の高いものになる」という点については、近年においてもその傾向は無くなっていないと考えられる。現実とネットワーク上の情報との対応関係は GPS や RFID といった技術による位置情報、製品情報だけでなく、ある個人の購買履歴などの行動二関する情報なども含まれる。そしてその情報の精度はますます上がっていくと予想される。しかし、それらの情報精度の向上が必ずしも我々にとってプラスになるとは限らない。例えば、オンラインゲーム中毒のような状態にまで利用者を熱中させるコンテンツが、利用者の身体的な健康を害する恐れもある。このような状況を回避する為には、コンテンツの提供者に対して、利用者の行動情報を扱う際のガイドラインが必要だと考える。

ネットワークと人間の身体性について考える際に、ミッチェルやドレイファスによってなされた「人間とコンピュータの情報処理の間に本質的な差異はあるのか否か」という論点に加えて、次のような論点が重要になると私は考える。それは、ネットワーク利用の際の規則や規定の整備についての議論が必要だというものである。これに関する具体的な問題や解決案については別に議論が必要ではあるが、現実に利用者が増え普及が進むネットワーク社会の今後は、利用プロトコルについての議論なしに言及する事は出来ないと私は考える。

＊ 1 ウィリアム・J・ミッチェル『ME++ サイボーグ化する私とネットワーク化する世界』NTT 出版, 2006, p60

＊ 2　ヒューバート・L・ドレイファス『インターネットについて哲学的考察』産業図書, 2002, p4